若手教師の学び続ける姿勢を育てる研修の在り方に関する一考察

－「子どもの姿」を中心とする授業研究を主とした自主研修を通して－

42325004　佐々木　翔太

１　はじめに

近年、団塊世代の教師の大量退職に伴った若手教師の大量採用によって、教育現場ではこれまでの先輩教師から若手教師への知識・技能の伝承がうまく図ることができない状況にあり（中央教育審議会 2015）、若手教師の育成が喫緊の課題となっている。また、現代においては、急速な情報化や感染症の流行、未曾有の大災害など予測困難な時代に直面しており、このような時代を生き抜く子どもを育てるためにも教師の豊かな資質能力が求められている。これからの教師に求められる資質能力として、平成２４年８月の中央教育審議会答申では、「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」と提言している。本研究では、こうした探究的に学び続ける姿勢を若手期から身に付け、若手教師の力で学校現場を活性化させる研修の在り方について考察していく。

2　課題と目的

若手教師の育成の実態として、校内研修に関する実践が充実してきており、先行研究には、若手教師主体の校内研修の実践に関する研究（西田・岡崎 2023）や同僚から学ぶことを主眼とした若手教師支援の研究（高橋・姫野 2023）などがある。これらの先行研究では、校内研修を通して、若手教師の自尊感情・同僚性・資質能力の向上したこと（西田・岡崎 2023）や若手教師の支援の鍵となるのは若手教師に関わる複数の教師とのコミュニケーションであること（高橋・姫野 2023）などを明らかにしており、若手教師を育てる枠組みは学校単位で徐々に整備されつつあると言える。また、「教師は授業で勝負する」と言われるように、学校現場において授業が占める割合が大きい。若手教師の授業に関する学びの場として、校内の授業研究会が挙げられる。若手教師の授業研究に関する先行研究には、協働して授業力向上を目指す研修による小学校若手教師の変容に関する研究（前田・石井 2019）や認知的徒弟制の概念に着目した校内授業研究会における若手教師の学習過程に関する研究（北田 2007）などがある。しかし、若手教師の授業研究となると、指導力向上が主軸となり、若手教師が行った授業の何が課題なのかを議論することが中心となるため（澤井 2019）、教師の「教え方」に傾倒しすぎるがあまりに子どもの「学び」の有り様に視野を十分に広げられてこなかった（坂井 2020）との指摘もある。そのため、子どもの学びについて語らい、「子どもの姿」に着目した授業研究が今後より一層求められている（佐藤　2015、鹿毛 2019）。授業研究において「子どもの姿」に着目することで、坂井（2020）は、「子どもを理解するということに留まらず、それを授業づくりという視点から検討することで相対化し、『反省的実践家』としての教師自身の成長の可能性を見出している」と述べており、「子どもの姿」は、教師の探究的な学びを支える指標となると考える。しかし、これらの校内研修や授業研究会は、先輩教師が企画して若手研修を実施する場合が多く、さらに、学校の規模や在籍する子どもや同僚の実態によっては、自由な研究が行えないことや成果が見えないことに対するネガティブなイメージを抱く教師も多い（前田・浅田 2020）。

そこで、本研究で着目したのが自主研修である。川田（2022）は、学校内での研修や公的な研修において主体性が生まれにくいのは、同教科のほぼ同年齢の教師が、自身の専門について学び合う機会や参加者が自らの意思に基づいて自律的に研修を進める機会が少ないからだとし、自主研修が学び続ける教師の主体性育成に

効果があると示唆している。自主研修に関する先行研究には、オーナーシップに着目した国語科若手教師の研修の在り方に関する研究（川田 2022）や特別支援教育を担う教師の専門性の向上に向けた教員養成プログラム開発に関する研究（堀子 2022）などが挙げられる。しかし、自主研修においても、先輩教師や大学教員が組織した研修が多く、若手教師が中心となって設計し実施した自主研修に関する先行研究は管見の限りない。

以上を踏まえて、本研究の目的は、「子どもの姿」から捉える授業研究を中核に据えた若手教師主体の自主研修を通して、若手教師の学び続ける姿勢が探究的に変容し、現場での実践でどのように活かされたのかを明らかにすることである。また、若手教師の授業に関わる力量形成において、先輩教師や大学教員との協議を通して、若手教師にとって新たな視点が提供される環境が整備されていることが必要（前田・石井 2019）であるため、若手教師のニーズに応じた講師を定期的に招聘しながら、協働的に学びを深めていく所存である。

3　研究方法

（1）対象

現在、県内の小学校で勤務している採用２年目の教師（以下、若手教師と表記する）数名と筆者を含めた教職大学院生の数名を研究対象として自主研修を行う。自主研修の中核にある授業研究は、若手教師の中から数名の授業者を選定し、その授業者が、勤務校で行う普段の授業を対象とする。

（2）方法

授業者が､授業の様子を動画や写真で記録し、その情報を踏まえて、事後協議会を設定する。そして、定期的に若手教師のニーズに応じた講師を招聘し、協働的に学びを深める。また、授業研究を核としつつも、各勤務校における特徴的な実践を共有する場や、現代的な教育の諸課題に関する意見交流の場を定期的に設けるなど、多角的な視点から「子どもの姿」を見取ることができるように研修内容を組んでいく。そして、この自主研修を通して検討したい研究の目的について、自由記述のアンケート調査や半構造化面接を行うことで明らかにしたいと考えている。なお、現在、自主研修のスケジュールは細かくは決まっていないが、事前にニーズを聞き出しておき、若手教師の負担などを考慮しつつ、勤務時間外において月１回のペースで進めていくつもりである。加えて、自由参加の形を取り、オンラインでの実施も想定している。

4　今後の研究について

自主研修は、若手教師の主体性を大切にし、なるべく彼らのニーズに応える形で実施したいと考える。また、自主研修の場を、若手教師同士の意見交流の場にとどめるのではなく、自主研修で考えたことを現場での創造的な実践につなげられるようにしていきたい。具体的な支援としては、授業づくりなどで、若手教師の協働する場面を取り入れることで、現場での実践に対する孤独感を払拭し、若手教師の横のつながりを生み出すことに留意していく所存である。

【参考文献】

・鹿毛雅弘『授業という営み-子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版、2019 年
・川田英之「国語科若年教員の研修の在り方に関する考察-オーナーシップに着目した参加者の主体性育成の観点から-」『香川大学教育実践総合研究』45 巻、2022 年、1-9 頁。
・北田佳子「校内授業研究会における新任教師の学習過程-『認知的徒弟制』の概念を手がかりに-」『日本教育方法学会紀要』33 巻、2007 年、37-48 頁。
・坂井清隆「『子ども理解』を中核とした校内研究の試み」『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』10 巻、2020 年、267-274 頁。
・佐藤学『専門家として教師を育てる-教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店、2015 年
・澤井陽介『教師の学び方』東洋館出版社、2019 年
・高橋賢治、姫野完治「同僚から学ぶことを主眼とした若手教師支援の研究」『北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要』第 13 号、2023 年、1-10 頁。
・中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～（答申）」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf（参照日 2024.2.12）
・中央教育審議会（2012）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf（参照日 2024.2.12）
・西田陽介、岡崎浩幸「若手教師主体の校内研修の実践に関する研究 ―自尊感情・同僚性・資質能力の向上を目指して―」『富山大学教育学部紀要』第１巻、第２号、2023 年、33-52 頁。
・堀子榮「特別支援教育を担う教師の専門性の向上に向けた教員研修プログラムの開発-聖徳大学特別支援教育未来創造研究会の取り組みを中心に据えて-」『聖徳大学研究紀要』第 33 号、2022 年、57-63 頁。
・前田康二、石井宏典「協働して授業力向上を目指す研修による小学校若手教員の変容―研究授業後の省察内容に着目して―」『次世代教員養成センター研究紀要』5 号、2019 年、207-215 頁。
・前田菜摘、浅田匡「小中学校教師は校内研修をどのように捉えているか-尺度項目ならびに比喩形成課題の回答から-」『日本教育工学会論文誌』43 巻、4 号、2020 年、447-456 頁。